学生年代への銭湯 PR を目的とした広報活動

団体名●石川県公衆浴場業生活衛生同業組合／代表者名●高島　悠（進路支援課）

はじめに（背景・目的・目標）

地域住民にとって身近な存在である町の銭湯。今年度も廃業や休業が相次ぎ、金沢市では2025年3月現在で14店舗という状況になった。

今年度の取り組みとしては、昨年度に引き続き銭湯を知り、利用を促す目的の広報誌となる「かなざわおふろ旅新聞 第3弾」を発刊した。部数は2,000部。

各銭湯や地域のコミュニティ施設、石川県立図書館にも蔵書された。また、今年度より「パパママ銭湯」が金沢市内で開催され、本学のこども学科の学生による「こども入浴支援」の企画が始まった。

活動内容①

まず、第一に「かなざわおふろ旅新聞」発刊において、記事の内容としては前回同様、おふろ旅マイスターからの銭湯愛溢れるコラムを中心に、組合加盟銭湯一覧を提示した。また特集としてはパパママ銭湯の紹介や時代と共に歩んだ「金沢の温泉銭湯文化」や銭湯を支える方々の紹介などを新たに取り入れた。

↑新聞の閲覧はこちらから

活動内容②

今年から金沢市内の公衆浴場で「パパママ銭湯企画」の実施が始まった。金沢市と銭湯組合が協同で実施しているこの企画。日常の育児に奮闘しているパパやママのために、お風呂にゆっくり浸かって一息つける、そんな時間を用意した。

公衆浴場で2時間程度、子連れ歓迎タイムを設定。金沢星稜大学の人間科学部こども学科に在籍する保育士志望の学生やサポートスタッフを配置。お子様の着替えのサポートや臨時託児ロビーでお世話をすることで、未就学児を持つパパやママが公衆浴場を利用しやすい環境づくりを構築した。たまには、ゆっくりお風呂に入ってもらう事を目的としたサービスである。またこれまで計4回金沢市内の銭湯で実施していたが、復興入浴支援として和倉温泉総湯を会場とした「出張パパママ銭湯」の開催も計画して、七尾市内の幼保施設15箇所延べ800名の園児に告知を行った。能登半島地震で壊滅的な影響を受けた和倉温泉の復興も兼ねて、憩いの場となる総湯での無料入浴支援ボランティア活動を実施した。

【2024年度開催実績】
5/18（土）　れもん湯（8組）
7/20（土）　諸江の湯（10組）
9/7（土）　れもん湯（10組）
10/5（土）　金沢温泉金石荘（10組）
3/15（土）　出張特別企画！和倉温泉総湯（30組）

成果、結果の考察

「かなざわおふろ旅新聞」においては、多くのメディアにも取り上げられ、県の郷土紙としても蔵書させていただくことになった。また地震等の災害により、入浴が困難な環境下においても、銭湯は「災害時生活支援拠点」としても大変重要な役割を担っている。金沢市とも協定を結んで、地域住民にとって開かれた居場所としても活用されていることを本紙からもメッセージとして届けることができた。

今後の課題、展望

今後は金沢市内の銭湯に留まらず、石川県内の銭湯へ視野を広げ、県内全体の活性化に繋がるような媒体の制作、発信を目指して新たな取り組みを計画するつもりである。新聞の第4号発刊、石川県銭湯図鑑制作なども予定している。また引き続き若者世代でさまざまな企画を公衆浴場組合とタイアップして繰り広げ、銭湯が憩いの場として、そしてゆっくりくつろげる場所としても人々の暮らしの一助となるような活動を続けたい。